禁　無断転載

（要約版）

アルコール摂取を引き起こす状況およびアルコール摂取のもたらす心理学的機能の検討

助成研究者　横光健吾（北海道医療大学大学院心理科学研究科）
共同研究者　岩野　卓（医療法人北仁会旭山病院臨床心理室）

目　的

本研究では，研究１においてアルコール摂取に対する欲求を引き起こす状況およびアルコール摂取によってもたらされる心理学的な機能に対する期待についての項目を収集し，信頼性と妥当性を有する尺度を開発することを目的とする。そして，研究２においてアルコール依存症患者を対象に，アルコール摂取に対する欲求を引き起こす状況とアルコール摂取によってもたらされる心理学的機能に対する期待との関連を検討し，アルコール摂取を引き起こす心理学的メカニズムを明らかにすることを目的とする。

研究１：アルコール摂取に対する欲求を引き起こす状況および アルコール摂取に対する期待を測定する尺度の開発

予備調査を実施するうえで，主診断がアルコール依存と診断された精神科通院または入院患者 60 名に調査を依頼し，書面において研究参加の同意が得られた 57 名を対象に質問紙調査または半構造化面接を行い，記入漏れや記入ミスのあった回答を除いた有効回答者 35 名(男性 33 名，女性 2 名，平均年齢＝56.51 ± 12.24 歳)を分析の対象とした。研究協力者は，①デモグラフィックデータ，②WHO/AUDIT 問題飲酒指標，③アルコール摂取に対する欲求を引き起こす状況，④アルコール摂取に対する期待に関して回答した。研究協力者のうち，21 名(60%)が自助グループを活用していた。研究協力者の受診期間は，10.56±10.70 年(範囲: 1-38 年)であった。収集された項目に関して，臨床心理学を専攻する博士後期課程の大学院生 1 名および精神科でアルコール依存症患者に対する臨床経験を有する心理士 2 名によって KJ 法を行った。その結果，アルコール摂取に対する欲求を引き起こす状況 37 項目とアルコール摂取に対する期待 31 項目が抽出された。その後，先行研究を参考に，予備調査で抽出された項目と内容が重複しないと判断された項目をそれぞれ加え，最終的にアルコール摂取に対する欲求を引き起こす状況 49 項目，アルコール摂取に対する期待 42 項目が抽出された。

本調査を実施するうえで，地方都市に在住する 20 歳以上の成人 285 名に調査を依頼し，書面において研究参加の同意が得られ，記入漏れや記入ミスのあった回答を除いた有効回答者 201 名(男性 85 名，女性 116 名，平均年齢＝21.00 ± 9.23 歳)を分析の対象とした。研究協力者は，①デモグラフィックデータ，②WHO/AUDIT 問題飲酒指標，③Alcohol Risk Situations Questionnaire (A-RISQ)暫定版，④Alcohol Psychological Expectancies Scale (A-HOPE)暫定版に回答した。A-RISQ 暫定版，A-HOPE 暫定版の各項目とアルコール依存の重症度を測定する AUDIT の合計得点とで相関分析を行なった結果，軽度から強い正の相関関係が認められた(r = .39 - .79, p < .05)。したがって，A-RISQ 暫定版の 49 項目と A-HOPE 暫定版の 42 項目は，アルコール摂取と関連する項目として適切であることが示された。A-RISQ 暫定版，A-HOPE 暫定版に関して，天井効果の有

禁　無断転載

無を検討した。その結果，A-RISQ 暫定版の２項目と A-HOPE 暫定版の２項目に関して天井効果が認められたことから，上記の項目はその後の分析および因子分析から除外した。さらに，A-RISQ 暫定版，A-HOPE 暫定版の各項目について GP 分析を行なった。その結果，全ての項目において有意な群間差が認められた($p < .05$)。したがって，A-RISQ 暫定版 47 項目，A-HOPE 暫定版 40 項目を用いて因子分析が行われた。A-RISQ, A-HOPE の因子構造を明らかにするために，最尤法，プロマックス回転による探索的因子分析を行った。その結果，A-RISQ に関して，３因子(「ストレス状況」,「対人関係状況」,「習慣的状況」)15 項目が抽出され，因子寄与率は 70.77%であった。また，A-HOPE に関しても，同様の手続きを行なった結果，３因子(「対人関係の円滑化」,「能力の向上」,「不快感の除去」)15 項目が抽出され，因子寄与率は 70.15%であった。信頼性に関して，合計得点および各下位尺度得点は十分な内的整合性を示したことから，A-RISQ，A-HOPE は一貫性を有した尺度であると判断できる。基準関連妥当性に関して，相関分析の結果，さまざまな状況におけるアルコール摂取に対する欲求の強さとアルコール摂取に対する期待の大きさはアルコール依存症の重症度と関連するという仮説と一致したことから，A-RISQ，A-HOPE は基準関連妥当性を有する尺度であると判断できる。性差の検討を行なった結果，A-RISQ，A-HOPE の合計得点および下位尺度得点に関して，統計的に有意な性差は認められず，性差も小さいことから，わが国において，さまざまな状況においてアルコール摂取に対する欲求およびアルコールを摂取することによって得られる結果への期待に関しては，性差は認められないことが明らかとなった。以上のことから，研究１によって開発された A-RISQ, A-HOPE は十分な信頼性と妥当性を有する尺度であるといえ，アルコール摂取に関連する欲求を引き起こす状況やアルコール摂取によって得られる心理学的な機能への期待を測定することが可能になった。今後の課題として，信頼性に関して，研究１では十分な内的整合性が認められ，一貫性のある尺度であることが示されたが，再検査信頼性等によって，安定性を確認する必要がある。また，研究１では，一般サンプルを対象に質問紙調査を行ったが，今後臨床サンプルを対象に，本研究と同様の因子構造を確認し，臨床的妥当性を検討する必要性がある。

研究２：アルコール摂取に対する欲求を引き起こす状況と アルコール摂取に対する期待との関連の検討

主診断がアルコール依存と診断された精神科通院または入院患者 40 名に調査を依頼し，書面において研究参加の同意が得られ，記入漏れや記入ミスのあった回答を除いた有効回答者 20 名(男性 15 名，女性５名，平均年齢＝45.85 ± 11.34 歳)を分析の対象とした。研究協力者は，①デモグラフィックデータ，②WHO/AUDIT 問題飲酒指標，③A-RISQ，④A-HOPE に回答した。研究１の結果から，A-RISQ，A-HOPE の下位尺度得点は AUDIT との間で軽度から中程度の正の相関関係が認められることが明らかとなっている。そこで，AUDIT の合計得点を制御変数とした偏相関分析を行なった。その結果,「ストレス状況」は,「対人関係の円滑化」と弱い正の相関関係を示し,「能力の向上」,「不快感の除去」と中程度の正の相関関係を示した($p < .05$)。「対人関係状況」は，A-HOPE の各下位尺度と中程度の正の相関関係を示した($p < .05$)。さまざまな状況におけるアルコール摂取に対する欲求とアルコールを摂取することで得られる結果に対する期待との関連は，先行研究においても検討されており，アルコール摂取につながる要因とし

禁　無断転載

てさまざまな状況における欲求やアルコール摂取に対する期待の重要性が示唆されている。しかしながら，本研究も先行研究と同様に，横断的にさまざまな状況におけるアルコール摂取に対する欲求とアルコールを摂取することで得られる結果に対する期待の関連の検討を行なったにすぎない。Connor et al.(2011)は，アルコール摂取に対する期待は，さまざまな状況における欲求を介して，アルコール摂取を予測するといった媒介モデルを縦断的に検討している。Connor et al.(2011)の問題点としては，媒介モデルの検討を行う際に，潜在変数としての欲求や期待を詳細に検討せず，一つの因子としてモデルの検討を行なっていたことがあげられる。したがって，今後の研究としては，アルコール摂取に関連する心理学的なメカニズムを，本研究で作成された尺度を用いて，各下位尺度間の関連を考慮したより詳細な検討を行う必要がある。

総合考察

本研究によって，人々がどのような状況下でアルコール摂取に対する欲求を引き起こすのか，またアルコールを摂取するうえでどのような結果を得ることができると期待しているのかを明確にすることが可能となった。また，アルコール依存症者は，特定の状況において，特定の心理学的な効果を期待してアルコールを摂取することが明らかとなった。このことは，アルコール依存症者のアルコール摂取を引き起こす心理学的なメカニズムを，欲求を引き起こす状況とその状況における認知的な側面から明らかにしたといえる。今後の課題としては，臨床サンプル，非臨床サンプルにおける各変数間の差異を検討することで，アルコール依存症者の特徴をさらに解明していくことにつながる。そして，アルコール依存症患者のアルコール摂取に関する心理学的なメカニズムのさらなる解明につながるとともに，アルコール依存に対する心理学的介入の効果を向上させることにもつながることから，今後のさらなるアルコール依存領域における実証的な研究が期待される。